

学校・保護者・地域の連携で学校創造を！

札幌市立川北小学校

I はじめに

学校改善・開かれた
学校作りにつながる
評価

1 本校における学校評価のねらい

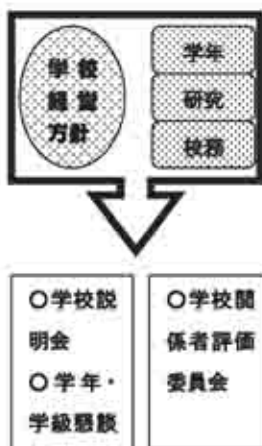
本校においては、今年度の学校評価の取組を行うにあたり、学校経営方針に基づく日常の教育実践を中心にすすめること、学校・家庭・地域の双方向の意見交流のもとに、教育活動を見直す体制を試行することを目的とした。学校改善の試みはこれまでも取り組まれてきたが、今年度本校では多くの学校関係者の思いや願いを学校創造にいかすことで、「開かれた学校作り」につながるものと考えた。

2 昨年度の学校評価をもとにした改善点

昨年度の学校評価において、「成就感、満足感、充実感」等が子供たちの生活に感じられるのかどうかを確かめるためのアンケートを実施した。また、それらについて「保護者」「児童」「教職員」の3者の視点からも評価が必要であるとしてアンケートを行った。こうしたアンケートは数年ぶりのことであったが、保護者からは8割近くの回収率で協力をいただき、本校の教育を見つめなおす契機とできた。今年度も「子ども達の学校生活や学習活動での変容」を焦点としてアンケートを中間・年度末の2回実施し、併せて学校自らの自己評価を重ね合わせながら進めることとした。

さらに、「学校関係者評価委員会」設置し、第3者の意見を生の声で反映させることとした。その際、学校関係者として子ども達に関わる方々に幅広く協力をお願いすることとした。

II 本校の学校評価システム



1 自己評価と評価委員会

学校経営の方針ならびに経営の重点に基づき計画した「学年・学級経営」「各校務部・委員会の計画」を中間と年度末の2回自己評価することとした。また、経営の重点から導いた各校務部等の今年度の課題も明らかにしながら、その課題にできるだけ沿うような評価項目でのアンケートを「児童・保護者・教職員」それぞれに合わせて作成し、評価を行う上での重要な参考資料とした。この自己評価に当たっては、本校の各部長を中心とした「教育課程推進委員会」が「評価委員会」を兼ね、実施に当たっての企画・提案・分析を行うこととした。

2 学校関係者評価委員会

できるだけ幅広い学校関係者の構成になるようにと、学校評議員、PTA 役員、開放図書館司書、スクールガード、そして児童会館館長らに依頼し委員会を立ち上げた。予想通り、学校だけでは知れない子ども達の姿も明らかにすることができた。

Ⅲ 学校評価の年間の流れ

	自 己 評 価			学校関係者評価
	学校（教職員）	児童	保護者	学校関係者評価委員会
4	学校経営方針・経営の重点 年間活動計画決定 学年・学級経営方針決定 学習参観懇談会	6年生：学力学習 状況調査	学習参観懇談会参 加	
5	学校評価の重点項目決定、アンケート の内容確認 学校公開・説明会開催 運動会	2～6年：学力テ スト	学習参観・説明会 参加 運動会参加	
6	学習参観懇談会		学習参観懇談会参 加	学校関係者評価委員委 嘱 第1回学校関係者評価 委員会開催（説明と、 体制決定）
7	教育相談 学年、各校務部・委員会での中間の 学校評価の討議 中間評価のアンケート実施	児童アンケート	教育相談参加 保護者アンケート	
8	アンケート結果の分析 中間の評価での改善方向のまとめ			
9	中間の自己評価書の確認 学校関係者評価委員会への説明 学習参観懇談会	通知表「あゆみ」	学習参観懇談会参 加	第2回学校関係者評価 委員会（学校関係者評 価書の討議・決定）
10	中間の学校評価の公表（資料配付、 ホームページ） 休日参観		休日参観参加	
11	学習発表会		学習発表会参加	
12	教育相談 自己評価に関わる教職員意見集約 年度末アンケート実施	児童アンケート	教育相談参加	
1	アンケート結果の分析 学年、各校務部・委員会での年度末 の自己評価の討議 学習参観懇談会		学習参観懇談会参 加	
2	学校評価の全体討議・自己評価書の 決定、次年度の改善方向の確認 学校説明会（移行措置に伴うカリキ ュラム・日課表等の変更）			
3	学校関係者評価委員会への説明 懇談会 学校評価の公表（資料配付、ホーム ページ）	通知表「あゆみ」	懇談会参加	第3回学校関係者評価 委員会（学校関係者評 価書の討議・決定）

IV 学校評価の方法

子供の育ちを指標にした評価

1 自己評価

(1) 項目の設定

学校経営の方針と重点から、今年度の教育活動でポイントとなる事柄をピックアップし、評価項目につなげるように考えた。また、教育活動で押さえるべき分野がそれぞれ網羅されるように配慮した。さらに、「保護者が、子どもの姿を通して学校の教育活動を判断できるような項目や内容にする」ということも留意した点である。教職員の活動の良し悪しではなく、「子どもの育ち」が重要であり、またそれでは保護者は判断できないと考えるからである。その結果、次のような項目を設定した。

分野	評価項目
学年・学級活動の中で	ア. 学校に楽しんで通っていた。
	イ. 自分の考えを言ったり人の話を聞いたりできた。
	ウ. 決まりを守り、自分の役割が果たせるようになった。
学習指導の中で	エ. 意欲的に学習し、楽しく学びあっていた。
	オ. 興味や意欲が引き出される学習であった。
	カ. チャレンジタイムで学習意欲が向上した。
行事や学校生活の中で	キ. 挨拶や言葉遣いが正しくできた。
	ク. 行事等を通して子供が成長できた。
	ケ. 安全で居心地の良い学校環境であった。
家庭・地域との連携は	コ. 必要な情報が適切に伝えられた。
	サ. 地域ボランティア等の活動が生かされた。
	シ. 家庭・地域との連携を大切にしていた。

(2) アンケート

7月と12月の2回実施した。評価項目も重点に絞っていることから、アンケート項目も数を絞り、児童にはア～ケの項目で低学年9、高学年13の設問、保護者と教職員にはア～シの項目で16の設問とした。回答は「札幌市の学校評価」での方式としている。また、質問への回答だけでは学校教育への思いや願いを表現することは難しいのではないかと考え、児童・保護者・教職員のアンケートに記述欄を備えることとした。その結果、評価項目だけでは網羅しきれない事柄での意見や願いを汲み取ることができ、その後の分析に役立てることができた。

(3) 結果の集計と分析・自己評価書の作成

アンケートは児童・教職員は全て、保護者は7月と12月のアンケート共に8割前後の回収率となった。

児童については各担任が評価項目ごとの集計や記述内容の整理を行って教務に提出した。クラスごとの数値も示されているが、学年ごとの集計をもとに低学年と高学年の括り、児童全体の括りと分けて見られるようにした。教職員と保護者は、教務及び数名の手で集計した。保護者は学年ごとの集計とし、記述内容も学年ごとに整理した。それらの各項目の評価を数値化し、自己評価書の達成状況にはA～Dのランクで示した。

自己評価書では、達成状況はアンケートで示された数値を踏まえながらの評価を下したが、現在進めている取組の成果を明らかにしながら改善方向を示すものとした。

児童・保護者が応えやすいアンケートの設問の工夫

児童・保護者・教職員の評価の違いに着目

(4) 改善策の検討

改善策を検討するうえで留意したことは、児童・保護者・教職員の結果の違いに着目することであった。3者共に評価が高い、または低いというように同じ傾向が見られるときは、教育活動がねらい通り進んでいるかまたはすぐに方策を変えねばならないことがある場合である。しかし、一方が高く他方が低いという場合は、認識のずれが生じている表れであり、共通の目標が持ちづらい場合であると考えられる。今回もそうした結果が表れた項目があり、教職員の中で随分論議を行ってその原因と今後の改善策について検討した。中間評価の結果で明らかとなった改善策は、すぐに学年学級や様々な活動で意識的に力点を置くようにし、年度末評価で明らかになった課題については次年度の取組の重点として確認することとした。

2 学校関係者評価

(1) 学校関係者評価の役割

幅広い人選で、子どもの姿をより明確に

学校関係者評価委員は、学校評議員3名、PTA役員3名、開放図書館司書・スクールガード・児童会館館長各1名ずつの計9名で構成し、校長、教頭、他1名の教諭で委員会を開催した。学校からの説明の後、各項目に渡って委員各位から意見をいただいたが、教職員の目に見えないところでの子ども達の姿が披露され、子どもの育ちの現状並びに本校教育活動の課題をより明確に捉えることができた。

(2) 学校関係者評価書の作成

学校関係者評価委員への学校からの説明の後、後半の時間を使って委員のみによる会議を開いていただいた。本校の自己評価に対する見解をまとめる中で「適切さの表記はA・B…ではなく、○・△・×により行いたい」との申し出があり、その方法をとることとした。

V 評価結果の公表

様々な手段で様々な人に

1 公表の方法

本校では、「アンケート結果」「アンケート結果の考察」「学校関係者評価委員会の討議の概要」「自己評価ならびに学校関係者評価の評価書」を、文書で配付した。それとともに、ホームページでも掲載し地域の方々にも見ていただけるようにした。

2 公表の効果

学校だよりに紹介したことから、回覧で知った地域の方からも「資料を見たい」との申し出があり、お届けするというつながりも生まれている。また、本校で力を入れている「あいさつ運動」にも、来校する保護者の方々の関心が示されるということも見られるようになってきた。

VI 成果と課題

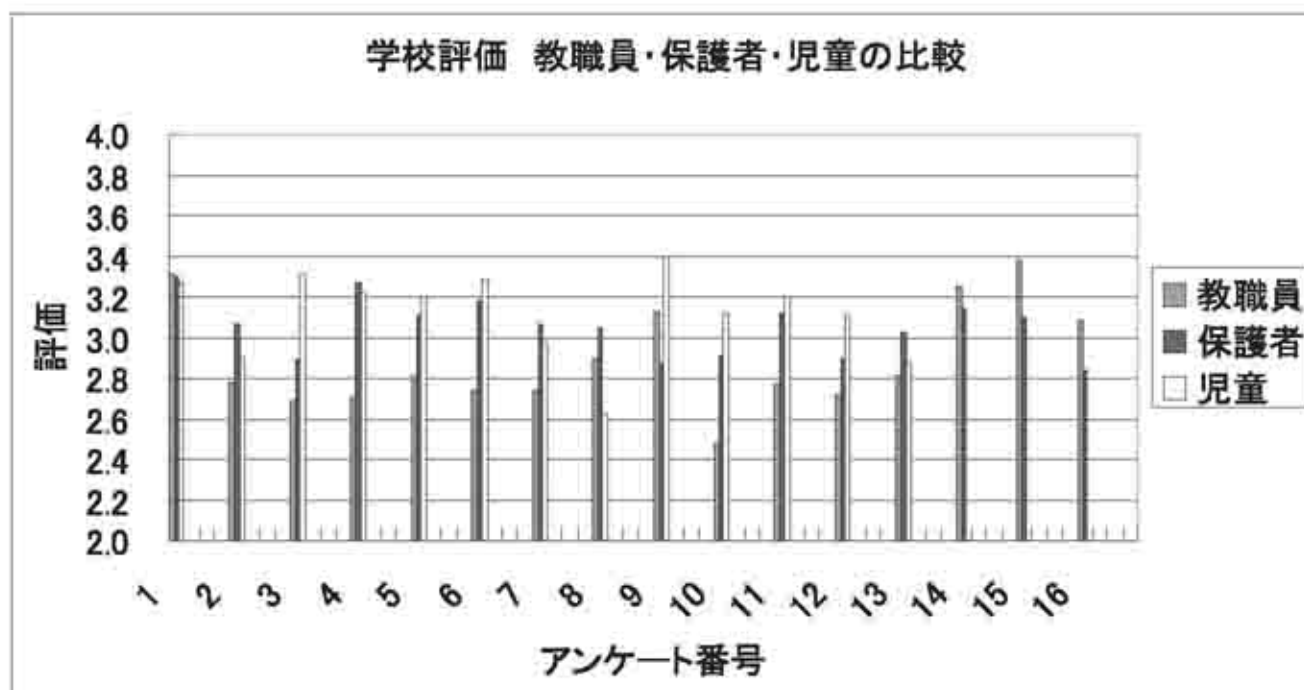
よりよい評価システム作りを

今年度「札幌市の学校評価」の実践を行ったことでの成果は、やはり「学校関係者評価委員会」を立ち上げることができたことである。学校・家庭・地域の連携が実践された具体的な活動であり、今後さらに発展していく可能性が秘められていると感じる。また、評価項目を重点に即して設定することで、これまでやや網羅的過ぎた評価活動が焦点化され、課題を明確に意識できるようになったこともあげられる。今後、さらにアンケート方法、評価項目や実践への活かし方を見直していきたい。

評価項目とアンケート項目の関連について

分野	学校としての重点課題	評価項目	教職員アンケート	保護者アンケート	児童アンケート
学年・学級活動の中で	<ul style="list-style-type: none"> 「受容」の態度にたった児童理解に努め、「認める・励ます・広げる・支援する」指導の確立 「学級が楽しい」「安心感がある」と子供が思える学級作り 子供たちによる自立的な活動の工夫とルール、マナーの指導 全校的な取組での不一致を生じない教職員の意思統一 	ア. 学校を楽しんで通っていた。	①子供たちは楽しく学校に通っていますか。	①お子さんは楽しく学校に通っていますか。	①学校が楽しいと思いますか。 低・がっこうはたのしいですか。
		イ. 自分の考えを言ったり人の話を聞いたりできた。	②子供たちは、自分の考えをはっきり言えるようになってきていますか。	②お子さんは、自分の考えをはっきり言えるようになってきていますか。	②人の前で、はきはきと自分の考えを話すことができますか。 低・はきはきとへんじをしたりできますか。
		ウ. 決まりを守り、自分の役割が果たせるようになった。	③子供たちは、粘り強く取組む力が伸びていますか。 ④子供たちは、社会のルールやマナー、家庭・学校の約束を守ろうとしていますか。	③お子さんは、粘り強く取り組む力が伸びていますか。 ④お子さんは、社会のルールやマナー、家庭・学校の約束を守ろうとしていますか。	③勉強や係の仕事や、最後までやり遂げようとしていますか。 ④交通安全や、お家、学校の約束を守ろうとしていますか。 低・べんきょうやきょうしつのごとをがんばっていますか。 低・やくそくをまもってせいかつしていますか。

(※ 資料の一部です。)



- | | | | |
|------------------|------------------|------------------|-----------------------|
| 1. 学校は楽しい | 5. 読み書き計算の力がついた | 9. 読み聞かせは楽しい | 13. 安心安全の指導は役立つ |
| 2. 自分の考えをはっきり言える | 6. 分かりやすい授業である | 10. 言葉遣い挨拶ができる | 14. 必要な情報が伝えられている |
| 3. 粘り強く取り組む | 7. 好奇心、探究心がある | 11. 相手を考える優しさがある | 15. ボランティア等が役立っている |
| 4. 社会のルールやマナーを守る | 8. チャレンジタイムは役に立つ | 12. 自分には良いところがある | 16. 学校、保護者、地域の連携が強まった |

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方向	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学年・学級活動の中で	ア. 学校に楽しんで通っていた。	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童、保護者、教職員共に評価が高く、概ね達成されている。ただ、少数ではあれ「楽しくない」と感じている児童があることは見過ごせない。さらに学級経営の充実に努めると共に「いじめ」等の撲滅に向けて努力することが必要である。 1学期に行った「いじめ言葉をなくそう」の指導は有効であった。その後校内で聞こえることは少なくなった。学級懇談会にあわせての指導が功を奏したのかもしれない。今後も学校・家庭双方での指導ができるよう工夫したい。 	○	○
	イ. 自分の考えを言ったり人の話を聞いたりできた。	B	<ul style="list-style-type: none"> 本校では「コミュニケーション力の育成」をテーマに日々教育活動を行っているが、この点でいずれも評価が低く出ているのは、現在の到達を表すものである。「コミュニケーション力」の捉えもしっかりしながらその方向を探りたい。 コミュニケーション力を「自分の意見を言える力」とだけ捉えていては力はつかない。次のウの項目とも関連するが、常に他者との関係で、「相手の思いを知り、その上で自分の思いを伝える」という双方向のつながりを大切にする関係作りに努めたい。 	○	○
	ウ. 決まりを守り、自分の役割が果たせるようになった。	B	<ul style="list-style-type: none"> 「ルール、マナー」では児童と保護者の評価が高く、教師との差が特に際立った。ルール・マナーは他者との関係で生じるものであり、学校の中で起きていることであることは当然である。しかし教師は児童にもっとマナーやルールを求めている反面、児童は概してこの点では大丈夫だと思っていることが伺えることに問題を感じる。児童が自分事として認識できるようにする工夫が必要である。個々の課題への取り組みと共に、友達と、クラスみんなと、学校全体でというように他者との関係なしにはできない取り組みに、意識の持たせ方も活動も工夫して取り組みたい。 今後、高学年での「ルール、マナーの学習」の場を設定していきたい。 	○	△
学校関係者評価者による意見	家庭と教師の意識の差をうめるような方法を考えてほしい。例えば、教師から保護者により積極的に連絡を取るなど、すばやい対応をしてほしい。				
学習指導の中で	エ. 意欲的に学習し、楽しく学びあっていた。	A	<ul style="list-style-type: none"> 出された課題に対してはまじめに取り組み姿が見られ、そうしたことが評価にもあらわれていた。教師の授業ぶりについても概して高い評価である。ただ、学力テスト等から「読解力、推察力、応用力」に課題があり、その点に留意して学力向上の取り組みを進めたい。 学びは「自学・自習」の態度も必要である。最近学びに対し二極化の傾向が児童に見られることから、家庭とも連携していきたい。 	○	○

(※ 資料の一部です。)